

La Lettre

— DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo —



牛や羊が草を食み、オークの森が再現 フランスの豊かな自然を伝えた『フランスまつり』

パリの自由の女神像が、東京湾お台場に姿を見せて、いよいよ「日本におけるフランス年」の開幕である。

その幕開けはゴールデンウィークの最中、四月二十九日から五月五日まで東京ビックサイトで行な

われた『フランスまつり』だ。気取らず、飾らない普段着のフランスを体験できるとあり、会場はどこも芋を洗うような賑わい。

その中でも意外な人気を呼んだのがミニ牧場エリアである。フランスの都会に住む人たちの多くが、農村で過ごす休日や心待ちにしているという。少し郊外へ行けば、牧場や田園、そして森が広がる。その家畜や木々を運んでフランスの自然を再現したのである。



フランスはヨーロッパ第一の牛の生産国。そこでフランス各地から各々の土地を代表する八百キロもある血統書つきの雌牛八頭を集合せた。その大きさと美しさに感嘆すると共にフランス系赤毛、斑点付き、淡いグレー系など肌の色や模様が多様性には目を見張る。

その中の例えばブロンド・ダキテーヌ種は肉牛として有名。日本人でも食べやすい柔らかい肉質が特徴だ。またフランス第一の乳牛ノルマン種は豊富なたんぱく質を持つミルクとしての評価が高く、あのカマンベールチーズもこの牛の乳から作られる。国内には約二十五種の牛がいるが、「ホルスタイン以外の多くの種類の牛を知ってほしかった」と主催者。フランスの牧場は地方色豊かで、牛の種類が見分けられるようになる。フランスを旅したときに、自分がどの地方を訪れているかがわかるようになる。そして牧舎のそばにはフランス人が憩いの場として愛してやまないオーク(樫)の森が再現された。オークはフランスの森の四一%を占め



見事なツヤと毛並のフランス各地を代表する雌牛8頭がビックサイトに集合

森の王者と呼ばれる大木になる。世界に二百種あるが、今回はその約七十種の苗木を運びこみ、同時に家具や道具を通じたオーク材とフランス人の関わりを歴史を展示した。フランスが世界に誇るワインが醸造される樽もオーク製なのである。かつて近代化に伴い、森林伐採によって森が失われた時期もあったが、今やフランスの森林面積は国土の二四%を占めヨーロッパの中でもスウェーデンやフィンランドに次ぐ広さとなった。しかも一三六種類の木々がフランスの森を作っている。それは百年を単位としてフランス人がつくってきた森なのだ。その多様性に富んだ森、そしてその自然が育てる家畜。そこから作られる豊かな加工食品。

『フランスまつり』は自然と歴史・伝統から育まれたフランス農業の奥の深さを我々に伝えてくれた。



会場内に展示された苗木とワイン醸造用の樽



「天守物語」



オペラ「サロメ」と「義太夫」が呼応

客席数を二百六十に設置したパリ日本文化会館ホールは、初日と二日目を除いて連日満席。楽日には通路を埋める盛況ぶりだった。「つまらなければ芝居の途中でも

伝統性と近代性がリンクし、古さと新しさ、西洋と日本などの対比があらゆる角度から如実に現れる効果をみせた。衣装、風俗はもちろんだが、音楽

御前の母と子の禁じられた恋の語りを用いて同じ悲恋の情念を映しだし、主題としても相乗効果をあげる意味合いがあります。しかしそれよりもまず、たとえば三味線が打楽器のように伶俐な感覚を打ち出すことで、舞台の質感を作り上げる効果を考えました」

日本語の美しさ、面白さを際立たせた

大正の設定は、この芝居の見せ場である妖怪、富姫



獅子頭を守り神にした天守五重にその主の富姫が登場する場面

足高に帰る手厳しいフランス人ですが、カーテンコールを何度も要求するのは稀なことです」

は特に舞台の方向性を打ち出した。たとえば芝居の幕開けはワグナー。これを「冒険だ」という意見もあるでしょう。またリヒャルト・シュトラウスの『サロメ』を使用しているが、一見ミスマッチに見える西洋音楽が不思議と伝統的な日本の舞台に合うことに驚かされる。そしてその仰々しい音楽と相反するように低くひしやげたような琵琶の音、また義太夫の語り

渡邊さんは喜びを隠せない様子。上演時間は約一時間三十五分。その間「最後まで飽きる事なく観ることができた」といった感想が何人からも聞かれたという。

「役者の登場を効果的に見せるために使ったオペラや悲恋の始まりに聞かせた義太夫は、出囃子や歌舞伎の下座音楽的に使いました。前半のオペラは、生首を扱った『サロメ』の主題に合わせて使い、後半は義太夫『損州合邦辻』。玉手

と武士、図書之介の悲恋を芸者と書生の関係に置き換えた。そうすることでこの舞台は日本語の持つ美しさを、よりストレートに観客に伝える役割を果たした。特に『天守物語』は読み物としてだけでなく、音声化されて初めて息づく台詞の美しさや面白さが際立つ戯曲なのである。

代表作ラシーヌの『フェードル』などをパリ始めヨーロッパ各地で上演。日本語による台詞劇を海外で上演する難しさを熟知している。そしてまたこの『天守物語』は、九年前に東京で後藤加代さん主演による上演経験を持つ芝居なのである。

『天守物語』

白鷺城で名高い播州姫路城の天守に住む富姫伝説を元に大正六年(1917)に書かれた泉鏡花の戯曲。天守五重に棲みつく富姫一族は獅子頭を守り神にする闇の王国を築き、人間の生き血を吸って生きている。そこで異界の富姫と人間界の図書之介の禁じられた恋が繰り広げられる。悲恋の発端も結局も人間界の主従関係を映し出し、権力の介入により再び富姫が葬られる姿に泉鏡花は、反封建主義を色濃く表した。反戦思想も濃いため、この戯曲は第二次大戦後まで上演されなかった。

舞台は、秋祭りの笛太鼓に合わせた客席の獅子舞から始まる。やがて童歌、そして稲妻の怪しい青い光が放たれると、突如ワグナー『ワルキューレの騎行』が鳴り響き、浅黄幕が切つて落とされて妖怪が住む天守閣の全貌が現れる。

渡邊演出の醍醐味は、これまで時代劇として上演されてきた舞台の設定をこの本が書かれた大正時代にしたところにある。大正という時代の歴史的背景と泉鏡花の持つ

「芝居は言葉。特に泉鏡花の日本語は日本人でも分かりづらいほど、くせのある言葉使いです。富姫の台詞は時に芸者のごとく、また奥女中、山の手夫人と千変万化。だからこそ言葉の遊戯性がある。この芝居は、それらを余すところなく表現できる後藤加代なくしてはあり得ませんでした」

くせがあるが故に難しく、単調になりがちな台詞廻しも、その経験を踏まえた上での、ある挑戦でもあった。そして九年を経た後藤さんの台詞廻しは円熟し、表現力に伴う抑揚、テンポなどは聞く耳を捉えて離さず、手ざわりある台詞としてフランス人に伝わった。

後藤さん自身、役柄は妖怪でも、人間以上に優しさがあり、また龜姫との関係でも和やかな人間性もある。ナレど妖聖の底印れぬ恐ろ

当財団の助成対象となったパリ日本文化会館開館一周年記念公演(有)空中庭園プロデュース『天守物語』が、5月26日～30日までの5日間上演された同会館での本格的演劇公演は初めてだが、連日満員の成功を収めたそこで演出家で東大名誉教授、フランス文学者の渡邊守章氏を中心に主演の後藤加代さん、相手役の石井英明さんにもお話を伺った。



写真奥は、富姫が亀姫と遊ぶためにまりを手にする所
手前は亀姫の従者の一人、舌長姥

された犠牲者たちは怨念の象徴。しかしそこには人間界の醜さを超越した美的王国が築かれている。「芝居の背景にはこうした日本人の持つ怨霊信仰もあり、日本人の演劇的想像力の土台を紹介する上でも意味がありました」
また生首の扱いを『サロメ』から、獅子頭の擬人化をヴィクトル・ユゴーの『エルナニ』から取り入れた泉鏡花は、日本文化の多様性を象徴している。



何人もの観客が涙ぐんだ舞台最後の心中場面
右は「清々しい二枚目」の図書之助

話も起こっているという。そしてチケットを購入して観劇した一般客の大半がフランス人。
「新聞、テレビ、雑誌、ラジオなど多くの取材を受けたことで、改めてフランスにおける演劇のステータスの高さを知らされた。残念なことに日本のマスコミからの取材は皆無。日本はタレント帝国主義。いくら内容が優れて



カーテンコール
ひょうきんな動作の獅子舞が観客を沸かせた

しさに負せたい。富姫は場面ごとに様々な要素のせめぎ合い。でも再演のおかげで自分の役に集中することができました」
「凛とした美しさ」を心がけたという後藤さんは、「存在ある声」という形で美しい日本語を語る女優との評価を受けた。また相手の図書之介役の石井英明さんも評判となった。渡邊さん曰く、「この配役は実はとても難しいのです。真の悲恋を成立させるには、年上の女に初めて口説かれる男の清々しさが求められる。それでいて二枚目。石井君は海外公演は初めてでしたが、期待に応えましたね」
稽古は着物の着方から始まった石井さんだが、大役に対するプレッシャーも、客席から、いわば固唾を飲んで観られているという体温

か伝わり、それが励みとなっていて乗り越えた。最後の心中場面では涙ぐむ若い女性が何人も見受けられたと聞き、「言葉を越えて伝わることがあるという貴重な体験を持つことができた」という。
日本文化の多様性を象徴する
舞台は終始、獅子舞、詩吟、狂言小舞や立ち回りなど日本的な出し物の見せ場に溢れている。
『天守物語』といえば、日本ではこれらの絢爛豪華なショー的舞台がもてはやされているが、後半の悲恋物語までしっかりと観せてこそ日本芸能の根本にある二部構成を紹介したことになる。そして富姫など戦国時代に惨殺

「そもそも日本文化は中国など様々な外来文化を吸収して独自のものを作りあげてきました。しかし海外では日本に対し、純粋な単一文化を求める傾向にあるが、それは間違い。日本人は異質なものを統合するのに長けた民族。本質は複数文化なのですから」
渡邊演出は視覚的に楽しませながらも、背景には多くの日本文化紹介の意味を含めていた。そしてさらに後半には幻想美の影にある泉鏡花の反封建主義や反戦思想が、むら雲のように立ち現われる。
幕切れは短波放送が交錯し、アメリカやドイツの国歌や『インターナショナル』が砲声や炸裂音と入り交じり、切れ切れに聞こえてくる。この作品が書かれた年は、時あたかも第一次世界大戦の最中、

日本に對勝安久に演じていた。その中で泉鏡花は最後に「こう言い放つ。―世は戦でも、胡蝶が舞ふ、撫子も桔梗も咲くぞ。…、馬鹿めが。―」
あくまで泉鏡花の美的耽美主義を追求しつつも、背後にある思想や精神を巧みに織り込んだ芝居に上げたことが、興行きを感じさせる舞台としてフランス人に高く評価される結果となった。
日本語による台詞劇の新たな発信
泉鏡花はフランスではほとんど知られていない近代作家だったが、この芝居がきっかけで興味を持つたという声が多く上がった。すでに『天守物語』の翻訳を出版する

してもタレントが出演しなければ記事にはしません。しかしそのタレントで台詞をきちんと言える人が何人いますか。日本は正しい日本語をしゃべれる俳優が今、本場に少ない。これが現状。コメディフランスでもロイヤルシェイクスピアカンパニーでも、それは当たり前なことなんですがね」
パフォーミング・アーツの分野で、未だに日本が海外で求められる舞台とはいえ、伝統芸能や言葉を使わない舞踏である。だからといって、そのような受容に甘んじてよいのだろうか。確かに日本語を解さない観客の前で演じるには、それ相応の工夫と力量が要求される。しかし今回のこの『天守物語』の舞台づくりは、新たな発信の可能性を示したといえる。

A propos de nos projets...

最近の事業から

日仏パフォーマンスアート交流展

〜於ベンタプラン現代美術センター〜

マルセイユから35キロあまり北にある小さな村ベンタプラン。ここで5月23日と24日の2日間、日本人とフランス人によるパフォーマンス・アートの交流展が、地元の美大生やアーティストなど総勢100名ほどの観客を前に行われた。

パフォーマンス・アートは戦後、既成芸術の枠を越える試みとして始まった。90年代の世界の構造変化に伴い各地で動きが活発化し、この時代の前半だけでも国際芸術祭は優に100を越えたという。従来の美術では素材として持ちえなかった「時間」を使って、物事の変容や流転を表現できることが現代のアーティスト達の心を捉え、美術、詩、演劇、音楽など様々な背景を持つ芸術家が新たな可能性をパフォーマンス・アートに見いだしているからだ。フランスではもともと詩の朗読が盛んで、ここから具体詩や音響詩などの新しい芸術領域が発達してきた。この交流展の企画者であるジュリアン・ブレンはその第一人者。初日に演じたクリストフ・タルコスもその流れを汲むアーティストだ。

公演者の一人である



霜田誠二のパフォーマンスは、石の台に乗ってガムテープやゴーグルといったものを顔に装着し、その度にフランス語で「衝突」や「停止」「先が見えない」などの言葉を紙に書いて地面に置いていくもの。頭部につけた2つの装置から出るデジタル音が日暮れの空に向けて鳴り響く。あたかも社会への警告のシグナルを発しているかのようだった。また67歳で最年長者の黒田オサムはダイズムに共鳴していた評論家辻潤にふれた作品を披露し、味のある作品との評判であった。日本語を理解するならフランスの観客もさらに堪能できたであろう。

芸術とは何か、人間とは何か、生きることとは何か。観る側にも強く問いかけるパフォーマンス・アートである。



A la carte

ア・ラ・カルト

BCBG流
フランスマナー談義

『フランスまつり』のお祭り広場では日替わりで幾つもの楽しいショーが開かれた。フランスの流行事情に

詳しいエッセイストの伊藤緋紗子さんとカルバトス大使であるフィリップ・ソーゼッドゥさんによるフランスの上流階級BCBGのマナーを紹介するトークショーは、幅広い年齢層の女性を集めて人気だった。



BCBGは、日本の女性雑誌にも数多く登場して関心を呼んでいる。お金では手に入らない昔ながらの貴族の生活は、長い伝統と歴史の繰り返しの上に初めて備わるもの。一朝一夕にはいかない。だからこそ憧れも強く、その上品さを再び見直そうという風潮が今、強まりつつある。

お金持ちになるもの」であるのに対して、BCBGは「であるもの」と伊藤さん。たとえば身のこなしでも、女性がけだるるように二本指でタバコを持つしぐさなどは、

「恐らく鏡を見て研究しているはず。彼らは人に見られる意識を持っていきます。自分を演出する術を忘れないBCBG。歩き方も背筋を伸ばして歩けば洋服まで立派にみえる」とソーゼッドゥさんは実際にステージ上でさまざまな歩き方を披露して会場を沸かせた。

それらの身のこなし方は、幼い頃に親や祖父、学校の先生など周囲の大人によってなされた躰の延長上にある。たとえば「メルシー（ありがとう）」や「シル・ヴ・プレ（どうぞ）」などを言うこと。食卓にはひじをつかないなどは、子供たちの耳にしつくくささやかれるのである。

特に日本の食卓は子供が中心になりがちだが、フランスの場合、あくまで大人が主役。大人の会話に決して割り込まないなど子供が大人に合わせる躰がなされるのである。

そしてこのマナー談義の最後には、シャンパンの栓を剣で開けるというめずらしいパフォーマンスをソーゼッドゥさんがみせ、さかんな拍手を受けていた。



BCBGは bon chic bon genre の略で「上品で育ちの良い」という意味。

Petite note

編集後記

サッカーW杯で沸くフランス。タクシーに乗ると「ナカタはいい選手だ」とか「ヨコハマには立派な競技場があるね」となかなか詳しい。サッカーはまさしく両国をつなぐスポーツ。二〇〇二年にはニッポンとフランスの直接対決を期待したい。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

La Lettre

1998年6月発行 Vol. 2 No. 2
 発行人：富永 重厚
 編集人：横山 道雄
 発行：笹川日仏財団
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12
 TEL：03 (3769) 6252
 FAX：03 (3769) 2090
 E-mail：matsugam@spf.or.jp

プロジェクト・カレンダー

98年7月〜9月

- 7月5日〜8月2日
《SHIHOサウンドジャパネスク・フランス公演》
- 7月6日〜31日
《第24回トウル音楽祭》
- 《世界各画から音楽家の卵200名が集う国際芸術学院/於トウル、ラ・ロシエル 8月22日〜9月12日》
- 《3R出会いから探求そして制作》
日仏若手舞踊家参加するワークショップ
大門口/於小国、沢内
- 9月4日〜8日
《日仏教育国際シンポジウム》
- 《21世紀向かう教育改革の動向と展望を探る》
日仏教育学会/於日仏会館
- 9月9日〜12日
《第1回日仏共同研究グループ 地域間協力》
《アフリカ問題を巡る日仏の知的交流》
現代日本とアジアに関する研究所/於パリ
- 9月10日〜11日
《第3回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム》
《外国語としての日本語教育を考へる》
フランス日本語教師会/於パリ